

日本
ハンザキ研究所 ニュース 2008(4) : 通巻 27号
(NPO法人化特集)

発行 2008年4月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川 292

Tel/Fax:079-679-2939

E-mail: j-hanken@sasayuri-net.jp

日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....
日本ハンザキ研究所NPO法人設立への道

ラッキー①

平成17年の3月に姫路市立水族館を退職し、オオサンショウウオの調査基地を求めて生野町にやってきたのがついこの間のことのように思える。自然環境のすばらしさと鉄筋コンクリートの校舎、運動場にプール、その上に木造で一戸建ての教員宿舎が奇麗な状態で残されていたのには感激した。調査用具を教室の片隅に置かせてほしいといった軽い気持ちで視察したのであったが、これならここに籠もって調査に専念できそうだと直感したのです。おまけに、国道から校内への橋から川を見下ろすと日中にもかかわらず巣穴からハンザキが歓迎の姿を見せてくれたのだった。またとない絶好のフィールドと言える。

ラッキー②

平成17年4月には朝来郡4町が合併し朝来市になったところで、各町役場からの余った机・椅子の他にもロッカー・本棚など多くの備品類を頂くことができたことです。大量の備品類が倉庫に山積みになっており、いくらでも持って行っていいということで、あっという間に研究室や図書室などが出現していった。

ラッキー③

2年目の平成18年には宝くじ協会の助成金によって川べりに安全にアプローチできる階段や観察用のオオサンショウウオ人工産卵巣穴が1千万円で完成した。ここは市川が左に曲がる場所で左岸側に格好の丸石河原が形成されているので、水遊びや魚とりのベースとしての好条件を備えている。

ラッキー④

昨年には兵庫県但馬県民局の事業で、ハンザキ保護センターが児童用のプールを改造して完成したのです。それは生野ダムの下流で山がずっと来る場所があり、川の付け替えと道路の拡幅工事が実施されることになったからでした。近くでこのような工事が実施されることになり、事前調査では200個体に及ぶハンザキが登録されたのでした。本当にタイミングのいいときの工事であり、今後の県下における河川工事に際してはいつでもハンザキの保護収容が可能になります。それに、兵庫県としてはコウノトリだけでなく、同じ国の特別天然記念物であるオオサンショウウオについても厚い保護体制を整えていること

を内外へアピールすることができることになり、一石三鳥ではないかと私は勝手に思っていますがいかがでしょうか？

そして、今年は周囲の皆様方のバックアップによって「特定非営利活動法人」設立の申請に至りました。これらの一連の出来事は既刊のハンザキ研ニュースに逐次書かせていただきましたので重複する文章になりますが、今号では特集号としてNPO法人化への準備や4月19日の設立総会、5月12日の兵庫県への認証申請に至る経過などを報告させていただきます。

この3年間は、まったく思いもしなかった方向に猛スピードで進んで来た感があります。1975年から開始したオオサンショウウオの生態調査でしたが、退職に当たってもう少しまだ足腰が夜の川を歩くのに耐える間はフィールドワークをやりたいという思いだけでここまでたどり着いたわけです。水族館の飼育係として海や川や山へとフルに現場主義を貫いてきた私にとっては、フィールドの無い生活は考えることができません。そんな意味で目下の私の毎日は至福の時を過ごしていると言えます。

廃校を借用して、勝手にハンザキ研究所を名乗り一人しかいないのに所長を自称してやってきました。家に入れることが不可能だった蔵書やハンザキの報告書・資料なども散逸させることなく収蔵することができました。自然環境もすばらしく周辺2〜3kmほどに人家はありません。施設も次々と整備されて来ました。こんな状況で私がライフサイクルを終えることができれば最高の幸せではありますが、研究所のほうは空中分解しかねません。それでも私は満足ですがハンザキの生態究明には50年百年と言う時間が必要です。そのためには研究所が存続し研究が継続されることが不可欠になります。また、研究を通じて私の行動が村おこしの一助になれば、お世話になっている地域の方々への僅かながらでも恩返しになるかもしれません。このような考えの下でNPO化を進めることとしました。

組織を固めて事務局を充実させることや、後継者候補を何人か会員にしてバトンタッチができる体制を整える必要があります。しかし、最も肝心なのは維持できるための財源です。現状は地域再生研究センターというNPO法人のバックアップを受けて研究所は維持管理されているのですから、独立した法人になれば自前で財源を確保しなくてはなりません。それには企業の支援や多くの個人会員の参加がなければなりたないのです。大丈夫かな？と言う不安も大きかったのですが、とにかく船出することにしました。事務局員には地域の次世代を担わなくてはならない若手の参加を期待しました。NPO法人の活動を陰で支えてくれる重要な人材であり、何が自分たちにできるのかを考えていくよい機会にもなると思います。ただ、住まいや勤めが街や市外であったりして活動に参加できないことが多いのが難点ですが、できるだけ多くの人に加わってもらい、出席できるときに出てもらえるようにしました。そのために少し多めの事務局のメンバーとなっていますが、無理なく参画していただければ、長続きもすることになると思います。役員や顧問、監事なども色々な方面の方々に加わっていただけました。

NPO化への事務局・設立総会・法人認証申請

<役員・事務局員>

理事長	栃本 武良 (日本ハンザキ研究所・所長)
副理事長	大沼 弘一 (兵庫県自然保護協会・理事)
理事	松井 正文 (京都大学大学院・教授)
	門上 保雄 (NPO法人地域再生研究センター・理事長)
	斉藤 敬子 (いくの銀谷工房・代表)
	竹村 由雄 (黒川地域活性化協議会・会長)
	竹村 真澄 (黒川あそぼ会・副代表)
	安原 達郎 (環境調査会社・代表)
	淵本 稔 (朝来市議会議員)
	奥藤 博司 (生野商工会・会長)
	中島 悟 (環境関連会社・環境計画副部長)
	柿木 俊輔 (日本ハンザキ研究所・研究員)
監事	中井 豊 (まちづくりプランナー)
顧問	坪内 由一 (朝来市議会・議長)
	安福 英則 (朝来市議会・副議長)
	能見 洋八郎 (税理事務所・所長)
事務局長	奥藤 修 (黒川あそぼ会・代表)
副事務局長	竹村 雅敏 (地域住民)
	池上 優一 (日本ハンザキ研究所・研究員)
会計	黒田 哲郎 (日本ハンザキ研究所・研究員)
事務局員	大江 満裕 (大明寺副住職) 竹村 雄一 (会社員) 木原 真一 (前・朝来市役所生野支所長) 宮崎 隆史 (日本ハンザキ研究所・研究員) 竹村 剛・上田 浩・白滝 英雄・藤原 進 (地域住民)

このようなスタッフの構成でスタートすることとなりました。企業の支援が最も大きいので、特に地元の企業に期待しましたが、なかなか経済状況が厳しいためか予想外に支援が得られませんでした。それでも多くの個人会員の入会を頂き、設立総会時点で110会員となり、4月19日の総会には約70名の出席をいただきました。井上朝来市長・坪内市議会議員・安福副議長のほか大勢の方からも祝辞を頂きました。姫路市立水族館長と兼任していた島根県立宍道湖自然館の寺岡さんや広島県の安原さんなど遠方からの出席には大変嬉しいことでした。盛会だった設立総会の議事録などを作成しNPO法人の申請書を5月12日に兵庫県に提出しました。書類作成に当たってはNPO法人コムサロン21にアドバイスを頂きとても助かりました。県地域協働課でも多少の手直しがあっただけで受領していただき、他の団体ともども8月20日の認証式を待つばかりとなりました。

多くの方の参加を願って

事務局 池上 優一

日本ハンザキ研究所を設立し、地道で精力的な活動を続けられる栃本所長の一助となればという些細な思いがスタートであった。振り返れば、オオサンショウウオ調査の素人として先生の指導をいただいた頃から早二十年近くが過ぎていた。地域の活性化のためのキーワードとしてオオサンショウウオを神輿に担ぎあげ、先生もろともお願いしますと進んできたものの、活動団体の中で目指すものの相違に納得いかず悩んでいた。それでも、「オオサンショウウオの博物館ができれば良いのだ」と自分に言い聞かせ、岡山県の津山から何度も出かけた。

オオサンショウウオの専門研究機関の創設という先生の意思の実現に向けて、少しずつお手伝いを進める過程で、やはり金銭的な問題が一番のネックとして見えてきた。その時、研究機関と博物館との併設という手法により、先生にも多少の歩み寄りを願い、同感する人々と歩調を合わせることができるようになった。さらに、率先して先生を支援する人たちが出てきた。そんな時、先生には失礼であったが、一時的なものでなく将来的に永続させるためには、NPO法人として確かな組織と運営をしていく必要があることを申し上げた。言い出しっぺに、後戻りは許されなかった。

先生が、本気になられたことを実感し、大部分で意志を同じくすると思われる仲間と、準備を進めてきたが、最後の詰めでは、決して急ぎ過ぎないように心がけた。そして、多くの人々との協働で4月19日の設立総会を迎えられた。ルールが敷かれるまでは我武者羅に進み、とにかくにも方向性だけは見えてきた。そして徐々に、地元の人たちが活動の中心になってきた。後で思えば、「こうするべきだった」ということが続出したが、その後は無事に着実に歩を進めている。

それにしても、先生の人脈の多さ、人柄のすばらしさ（多少頑固な面も否定できないが）は今更ながら感服している。そうでなければここまで継続できなかったかもしれない。

今後の課題として、できるだけ多くの方に参加していただきたいと思っている。資金的に協力していただけることに感謝することはもちろんであるが、願わくば同じ会員として顔を覗けたり、イベントに参加いただいたり、事務局に参加いただいたり、とにかく気軽に出向いていただきたいと切に願ってやまない。

前述したが、先生の「オオサンショウウオ専門研究機関」も良いが、私はどちらかというと「オオサンショウウオ博物館」の整備充実を第一に願っている。その意味において、早く整備が進み、楽しみにした来場者が足を運び、自然を満喫する時間が過ごせ、今風の言葉で言えば「癒し」の場になってくれれば良いと思う。私が当地を訪れるのも、その癒しを求めて通っていることも否めないように思える。ぎすぎすした喧騒社会をちょっと逃れ、心をリフレッシュして、また日常にもどる、そんな博物館になればと思う。そのためには、これからまだまだ先生にも頑張ってくださいたいし、我々も裏方として精一杯支援していきたいと思う。共感していただける多くの方の、お気軽な参加を願っています。



写真1
設立総会における役員
の紹介(左から)

竹村・齊藤・竹村
 淵本・大沼・栃本
 中島・安原・門上

写真2
同じく
(左から)

柿木・中井
 坪内・安福
 能見



写真3 井上朝来市長の祝辞

特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所 設立総会



写真4 テーブルの花飾りは竹村理事の手で



ハンザキ研NPO法人化までの日誌

2005年8月～2008年8月

- 2005年 8月 日本ハンザキ研究所設立
- 2006年 2月 日本ハンザキ研究所ニュース創刊
- 4月 黒川地域活性化協議会発足
- 2007年 3月 NPO法人化を目指して準備開始
- 9月 有志による準備会発足
- 2008年 4月19日 設立総会開催 113会員中67会員出席
- 5月12日 兵庫県地域協働課へ認証申請
- 8月20日 認証予定

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

人の前に立つことが大嫌いな人間が教師になり、水族館長そしてNPO法人の代表者として立たねばならなくなったのは本人の意図するところではなく、やむなく責務を果たさねばならない立場になってしまったなどといった感があります。友達との付き合いよりも、ただただひたすら生き物が好きで好きで、それしか頭の中には無かったままここまでやってきました。教師は正に「・・でも・・しか」で生物を教えクラブ活動では生徒と遊びまわっていました。運よく水族館の飼育係になることができ、趣味と仕事と同じという幸せな40年を過ごしました。学友たちは趣味で給料をもらうなんてけしからんと言いますが給料分くらいはいやな仕事もこなしてきたので、遊んでばかりいたわけではありません。

そしてハンザキとの出会いは、ハードなフィールドワークですが、私の運命をロスタイムの課題を決定付けることとなりました。34年目になるハンザキ調査ですが、現在までに1350個体を市川の生野ダム～黒川ダム間10キロで登録し、内750個体にマイクロチップを埋め込みました。永久的な個体識別法が確立され、ヒトより長生きするハンザキの生態解明には欠かせないこのバーコード入りチップ、1000個体挿入を目指しています。戸籍のはっきりした個体群を研究対象にして多くの若い研究者が集まってくれることを願い、受け入れが可能な研究所の体勢を整えることを、目下の最大の最優先の課題として考えています。そのためにもNPO法人（申請中）の組織が固まりしっかりとした活動ができることが求められると思います。

組織をまとめ円滑に運営していくのは容易なことではありません。それでも最終目標を目指してスタッフの団結と多くの会員の皆様方の支援によって前進していきたいと考えています。生野町第一号のNPO法人としても良き前例を残したいと思います。

この印刷物は、「セブン-イレブンみどりの基金」の助成により作成しています。